

までの列車のなかでは敗残兵扱いでした。

八路軍との戦い

愛知県 杉江彦保

戦雲急を上げる昭和十九年、十九歳で繰り上げ徴兵検査を受け合格、十一月名古屋第二部隊に入隊する。連日の注射で発熱休養の連続で、十一月二十五日夜は大陸に向け出発、現地入隊する。

朝、下関港を出港、波高い玄海灘を航行中、約二時間対潜監視を命ぜられへとへとでした。十二時間かかり釜山港に入港した。

朝鮮、済州を通過、徐州で旅団長の訓示で、中支派遣専部隊なるを知る。海州から淮陰の大隊本部のある所まで地下足袋で、一日十里約五日間行軍す。地下足袋のため、足の豆の出来ない者はひとりもなく皆なんぎする。淮陰付近は八路軍の拠点で治安悪し。

一期の検閲もなく重機関銃中隊にはいり連日の討伐

と、合間には対米訓練の毎日でした。飯のうえの蠅を追うようなもので、東西南北と連日でした。

二十年八月七日、第五中隊の分遣隊一個小隊が八路軍にやられ、応援にトラック五台で行くが、途中地雷のため半日ほどおかれて到着したところ、小隊長以下全員軍服をはがされ、全裸にてクリークのなかに浮いていました。非常に気の毒でした。

終戦の三日前に出張命令により、翌日徐州に向け出発、途中運河のなかの船がまったく動かず一日ついやしました。石はとんでくるし、不思議でしたが、帰隊してはじめて終戦を知り残念でした。

帰隊後すぐ身辺を整理して、旅団本部の連絡を待っていたが、状況は悪化の一途でした。何分にも八路軍の本拠地で旅団本部も旅団作戦をし、我が大隊の救出をはかっていました。状況は悪くなるばかりでした。我が大隊は意を決し、強行突破をはかり、二人ほどの犠牲で無事目的地東隴海線の海州兵舎に落ちつきました。

我々は武装解除もなく、連日半日ほどの道路作業、使役と鉄道警備が仕事でした。奥地からの引き揚げが始

まっすぐに新安鎮駅近くの鉄橋が爆破され、旅団命令で救援に出動、はげしい戦闘となり、歩兵砲小隊長はじめ五人ほどの戦死者と、十数人の負傷者が出る大変な戦いでした。

奥地の引揚者もだいぶ少なくなったころ、我々の武装解除がおこなわれましたが、その日の夜、国府軍は八路軍に全部没収されてしまい、三晩ほど連夜、敵の夜襲にあいみじめでしたが、国府軍の希望で、再度武装、武器を渡され平穩がもどりました。

我々は四月、最終引揚船で連雲港をあとにして帰路に着きました。

中国戦場での悪夢

静岡県 伊藤 万司

北支派遣軍の最前線「洛陽」城外に駐屯の「驚三九一七部隊(第百十師団)」通信小隊長として第十二軍の「老河口作戦」に基づいて「西峡口防戦作戦」に出動したの

は、春まだ浅い昭和二十年三月初旬であった。一望千里の麦畑の青い芽はまだ土の中に眠っていた。部隊長は「帯包少佐」である。

一路「西峡口」へと前進中のある夜、二キロほど先にある部落の偵察を命ぜられ、部下五人とともに騎馬で、麦畑のなかを進んだ。月の光がいやに明るい、麦畑には一切の遮障物はなかった。遠く部落が月の光を浴びて黒く浮かんでみえる。部落に近づくとつれて緊張が増した。

二、三百メートルに近づいたころだったろう。パ、パ、パと五、六発の銃声とともに弾がピュッと耳もとをかすめた。至近弾だ。「逃げる」とどなってくつわをかえした。偵察が任務である。三十六計を決めたが、耳もとをかすめる音が近いなと思った瞬間、馬もろともたおれこんだ。左足が馬の下敷きになったまま身動きができない。なにしろ馬の体重は四百キロ近くもあるのだ。馬は頭を持ち上げてみてもがくのみであった。相変わらずの銃声である。

「ここで襲撃されたらおわりだ」